デュオ

最後のコード、Eをかき鳴らしながら「ありがとう」と軽く頭を下げた。そしてまた頭を上げて見まわすと、いつものファンの女性たちに混じって、10人ばかりの初めて見る顔がまだそこにいて拍手をしてくれていたのがうれしかった。

アキラ、アキラ、アキラ。そう連呼してアンコールを求める少女たちに向かって、もう本当のオシマイと示すように、アキラと呼ばれたストリートミュージシャンはギターのエンドピンからストラップをはずすと、1時間ほど密着させていたそのギターを身体から解放した。自主制作CDを並べていた小型のトローリーケースにそのギターのネックをあずけて立てかけると、アキラはフタを開けてあるギターケースの中に散らばっている千円札や硬貨をゆっくり拾い集めて大きな財布に突っこんだ。

頭上に少女たちの視線を感じながら、アキラは後片づけを始める。

「こんどいつここでやりますか？」

「毎日いますか？」

「最後の曲、新曲？　すごいよかった」

「アキラの手、きれい」

さまざまな言葉に返事ができるものは返事をし、賛辞にはだまって片手をあげて応え、アキラはギターをギターケースに入れ、ＣＤと手づくりのポップやチラシを黒のトローリーケースに丁寧にしまい込んだ。

腰を伸ばして立ち上がり、リュックタイプのギターケースを背中に背負ったときだった。まだ立ち去ろうとしない少女たちの肩越しに突き進んできた、モアイ像を囲む鉄柵に腰かける男の視線に、アキラは体を硬くした。５メートルと離れていないそのモアイ像の後頭部を背にして、自分とほぼ同じ若さの男は、レッドツェッペリンのロゴのＴシャツが張りついたたくましい肉体の上に載る、アンバランスなほど華奢な頭を少し前に傾けている。その頭蓋の形、そして額、鼻、唇の位置と大きさは完璧な比率計算によって造形されたかのように美しく、肉食動物の澄み切った暴力性の光をたたえたその二つの目は、睨むようにしてアキラを捉えていた。

自分に何を望んでいる目なのかとふと考えをめぐらした。ために、その男から視線をはずすのに時間がかかった。少女たちはいぶかしげに振り向き、アキラの視線の先を探した。その少女たちの好奇心を集めながら、男は立ち上がるとぶらぶらとアキラに向かってきた。

身長もほとんど自分と変わらなかったが、年齢は少し下だろうとアキラは思った。

男は前をよぎる通行人も気にせずまっすぐにやって来る。少女たちが怖がって道を空けた。アキラに触れそうなほど近くに立つと、ジーンズのフロントポケットに両手を突っこみ、少し上目づかいで男はいきなりこう切りだした。

「思い出グラビティって曲、よかったけど、甘すぎね。んで、ＢＰＭもさ、90ぐらいにあげたほうがよくね。いま、50か60っしょ？　んで、イッツァロンリータイム、イッツアロンリーターーーーーーイム、で、思い出グラビティーーーーってなるじゃん。あそこもさ、思い出グラビティーの前、思いっきり縮めてさ、イッツァロンリータイム、イッツアロンリー、思い出グラビティーーーーにしたほうがまとまりいいよ」

突然やって来て曲のディテールに口出ししてきた無神経さにではなく、その率直さのほうにアキラは驚いた。

「ま、オレ、やたら英語使う歌詞は好きじゃねえけど。思い出グラビティーじゃなくって、素直に思い出重力のほうがいいんでね？」

さまざまな攻撃への免疫力が高まっているアキラは、「考えてみるよ」と応えただけで、トローリーケースのハンドルをつかんだ。

「あとさ」と男がまた口を開いた。「最後の曲、コード進行、当たり前すぎね、ってか、

古すぎね？　Ａｍ、Ｇ、Ｆ、Ｃと来て、また、Ａｍ、Ｇ、Ｆ、Ｆ７でサビにつなげるってさ、パクリとはいわないけど、ズルくね？」

ズルイという言葉に、アキラは少し気分を害した。みぞおちのあたりで小さな黒い竜巻が回転しているような気がした。だが、黙った。そして、もう一度、トローリーケースのハンドルを強く握った。

「ちょっと待てよ」と男が言った。

「帰りたいんだけど」とアキラが男の目を見て応じると、男は目の奥の光を緩めてアキラにこう言った。

「もう少しさ、音楽の話、したいんだけどさ」

アキラは男の本音をはかりかねた。

「なんで？」

「オレも、町田のほうで路上やってるし、ひとりで。あんたの噂聞いて、わざわざ聴きに来たんだよね。だから、もう少し、感想言わせてほしい」

「感想ならさっきので十分だよ、ありがとう」

「いや、絶対、後悔させねえから。おれの話聞いたら、あんたの音楽、もっとよくなるし。

本気だ」
傲慢に聞こえるこの言葉も、この男の口から発せられると、なぜか打算のない純粋さに思えてくる。確かに、バラードの曲をアップテンポにしたほうがいいという男のアイデアは新鮮だった。
変わったやつだと思った。だが、それゆえに、少しの時間、話を聞いてやろうという気持ちに傾いた。
アキラは仕方なさそうにうなずくと、普段なら駅の改札までゾロゾロとくっついてくる少女たちに向かって、「ごめん、こいつと少し話するから。じゃ、また。ありがとう」と両手をひらひらさせた。ぼんやりと二人のやり取りを見ていた少女たちは、途端に大きな笑顔を浮かべると、口々にさよならを言いながら渋谷駅の中へと消えていった。
「あそこでいい？」とアキラは、モアイ像に向かってアゴをしゃくり上げた。
男は自分がさっきまで座っていた鉄柵の上にまた腰を下ろした。アキラもトローリーケースを引いて男の左隣にやって来ると、ギターケースを降ろして自分の両腿で挟むようにしながら腰を下ろした。
男の横顔を見ると、尖った鼻先が少しだけツンと上向いている。唇も鼻先と同じ可憐な

弧を描き、少し尖っていた。眉は手入れされている様子はないが、そのままで形も密度も長さも完璧だった。まつげは長く、まるで少女のようだ。

アキラは自分のルックスに自信があった。それは鏡を通じて抱くようになった自信ではなく、年下だったり、年上だったり、多くの女達の言葉や行為によって培われた自信だった。隣に座るこのヘンなヤツも、ミュージシャンとして売れるのに必要なルックスを十分以上に持っているとアキラは思った。Tシャツの袖がはち切れそうな太い腕、そしてぶ厚い胸板。少女たちなら「かわいい」と評するだろう顔立ちと、その頑強な身体には大きな異和があった。一方で、アキラはその容姿の美しさを損なうかのような野卑で粗暴なアウラも感じた。それは貧しさのせいか、それとも孤独のせいか。それはアキラの知らない二つのものだったが、知りたいとも思わなかった。

「ロン・セクススミス、好き？」と男が聞いた。

「ああ」とアキラはうなずいた。

「ジェイソン・ムラッツは？」

「まあまあ」

「ニール・ヤング？」

「いいねえ」
「ウィルコ？」
「大好きだよ」
「グリズリー・ベア？」
「知らない」
「シガー・ロス？」
「うん」
「じゃ、オアシス？」
「嫌いだね。ま、1曲だけ好きなのあるけど。君は好きなの？」
「大嫌い」
そう言って男はニヤリと笑うとこう言った。
「オレと好き嫌いが似てるよな、やっぱ」
「やっぱ、って、どういう意味？」
それには答えず、男は一方的にアキラの曲について語り始めた。
「あのさ、ヨハネの声がするとかっていう曲歌ってたじゃん。キーがCで、Cのコードだ

けどFの音から始まるやつ。あれ、一番好きだし。ドラムとベースとストリングス入れてやりてえな、あれ。最高に決まるし。80年代のイギリスっぽいけど、いまっぽくもあるし。あの曲、歌詞以外、おれは完璧だと思ったけど」

「ありがとう」とアキラは笑顔を浮かべた。偏屈そうだが嘘をつきそうもないこの男からほめられると、実に嬉しかった。まるで、音楽評論家からほめられたような気分だ。

「思い出グラビティーのこと、さっき言ってたね」

「あれ、絶対、ＢＰＭ８０か90ぐらいがいいって。で、メロディーもさ、少し変えてさ。ＢＰＭ上げると、メロの甘さがものすげえ目立つから、Ａメロはむしろ単調にしてリズムを強調したほうがいいんだ。Ｂメロはさ、ダン、ツー、ダン、ツーって４ビートを強調したのに雰囲気を変えてさ、こんなふうにメロディーを変えるわけよ」

そう言って、男はからだを前後に揺すりながら、さっき聴いたばかりのアキラの曲を、メロディーとテンポを変えてララで歌った。Ｂメロのところでは、それまで８ビートだった首の動きを、４ビートの大きな動きにして歌った。Ｃメロも、男が言ったように、イッツァロンリータイム、イッツアロンリー、思い出グラビティーーーーにしたほうがカッコよかった。

アキラはしばらく黙った。男のアイデアの示した方向の正しさに複雑な気持ちになった。
アキラは試験を続けるような気持ちでこう質問した。
「キミに聞きたいんだけどさ、最後の曲、ボーイという曲なんだけど、コード進行のこと、ズルイって言ってたけどさ、キミだったらどうする？」
男はさっきからずっとアキラではなく、自分の真正面をじっと見つめながら話していたが、アキラの質問に初めて顔をこちらに向けた。アキラは男の瞳がまるで妖しい野獣のように輝いていることに驚いた。善と悪の境界線など自分の都合次第でいくらでも踏んづけて生きていく、そういう危険な人種のひとりではないかとアキラは感じた。
「二つ、道、あるし。たぶん。一つは不協和音を使う。ルートはずっとAにしておいて、ドーシーラーソー、ドーシーラーミフラット、っていう音を高音部で入れていく。サビで素直な和音に戻す」と言って、男は目を伏せた。
「もう一つは？」
「ま、あれはメッセージソングっぽいから、シンプルなコード進行にしたかったっつーのは、なんとなくわかるし」
「その通り」

「でもよ、あのコード進行はやっぱヤバイ。音楽好きならバカにする。だからふたつ目の方法は、あえて古臭え音にする。弾き語りだと不可能だけどな。ホーンとか入れて、60年代のリズム&ブルースみてえにする。オーティス・レディングとか」
「楽しそうだな。やってみたいねえ」と応えながら、アキラはこの男の発想力や想像力やセンスに、自分が少なからぬショックを受けているのを自覚した。つまり、明らかに自分にないものを持っている人物がここにいる。
「オレもさ、路上やってんけど、ほんとはバンド希望。あんたは？」
「うーん。そうだなあ。ずっとソロデビューしか考えてなかったから」
「バンドだとサウンドまで自分たちで作れるし。ただな、金、かかんだ」
アキラはこの男のプライベートが知りたいと思った。
「昼は働いてんの？」
「ああ。ガテン系」
「ガテン系って？」
「工事現場だ。中学出て土木会社に就職してさ、今に至るってわけ。コンクリート工もすれば解体もする。力仕事だ」

「それで筋骨隆々なんだ。うらやましいな」
「もう、やめてえ。ってか、やめる」
「どうして？」
「音楽、やりてえし。16のころから使いっぱしりばっかさせられてみ。失敗すれば先輩から小突かれたりしてよ。アホだったらエヘエヘって笑って続けられるかも知んねえけど、おれにはムリだ。オレは他のやつがオレの体にさわんのは我慢できねえタイプだし」
「町田で路上ライブしてんの？」
「週末な。でも、ギター、あんたみたいな高いヤツじゃねえから。安もんだし」
「値段じゃないよ。曲、作ってんだよね？」
「ああ。１００曲以上ある。毎日、作ってる。メロディーはできるけど、歌詞が追いつかね。もっと本読んどけばよかった」
「今からだって遅くないよ」
「あんたは大学生だろ？　いいとこの？」
「いいかどうか知らないけど」
「えーと、慶応だ」

「どうして知ってるの？」
「あんた、町田でも路上仲間じゃ有名だし」
なんで有名なのか、アキラには想像がついた。もちろん、音楽以外の理由で有名なのだ。
「あのさ」と男は真正面を向いたままこう言った。「オレとデュオ、組むっての、どう？最強のふたり組になんじゃね？」
アキラはこれが男が話しかけてきた目的だったのかと思った。
「ま、そうかもね。でも、オレはソロで行きたいとずっと思ってきたからなあ」
「最後はソロでやればいいし。路上で有名になってさ、レコード会社からオファーってか、目えつけられるまでデュオでやるってのもよくね？　オレもバンドが最終目標だし」
「まあ、考えてみるよ。いますぐには返事、できないな、当たり前だけど」
男は何度かうなずくと、じっと真正面を見続けた。しばらく沈黙が続いた。アキラが潮時かと思ったそのとき、男がまた口を開いた。
「あそこにおかしな女がいる」
さっきから真正面をじっと見ているのはそのためかと、アキラは男の視線の先に顔を向けた。だが、木曜の夜の渋谷駅南口を往来する通行人の流れの向こうには、ただのビルの

壁しか見えなかった。
「どこ？」とアキラが聞くと、男は無言でアゴを前方に向けてしゃくった。
「喫茶店の窓のすぐ横のビルの壁んとこ。真夏なのにダウン着てる。で、こっちをじっと見てるし」
アキラは目をこらしたが、男が言うあたりには何も見えなかった。ただビルの壁だけが無表情のままそこあった。
「わかる？」
「いや、女なんて、どこにいるの？」
「じゃ、あれか、幽霊か」
男の言葉は冗談なのか本気なのかわからなかったが、アキラが見た男の横顔にはどんな弛緩もなく、素朴な前方への関心が浮かぶのみだった。
「幽霊って？」
「幽霊」
「幽霊が見えるってこと？」
男はうなずいた。

「ぼくのこと、からかってる？」
男は黙ったまま首を振った。
「本当に見えてるのかい、幽霊が？」
「うん」と言うと、男は頭をかかえるようにして前かがみになった。「気に入られるとろくなことねえから。めんどうだし。ちょっと無視するから。悪いけど、もう少し時間、くれよ」
アキラは男が見ていないことを承知でうなずいた。くだらない芝居を打つような男には思えなかった。きっとそういう霊感というものがこの男にはあるんだろうと思ったし、この男の持つ、密度の高い情念が皮膚からしみ出でるような濃厚な妖しさは、そういった能力を持つ人間の特徴なのかもしれないとも考えた。
アキラが予想していたよりも長く、男は無言のまま、前かがみの姿勢を取り続けた。
やがて男はゆっくりと上体を起こした。
「もう、いねえ」と言って、男はため息のようなものを一つついた。
「どうやったら見えんの、幽霊って？」
口に出してから馬鹿な質問だなとアキラは思った。

「オレの頭ってさ、カリカリ動いてる頭とさ、ぼんやりしている頭とさ、いつも二つあんだよ。みんなも同じかと思ってたけど、オレだけみてえだけどな。幽霊が見えるのは、ぼんやりしている頭のほう。曲を作っているときは、二つの頭が両方いっしょに働くんだよ。でもよ、普段は、バラバラに働く。わかんねえよな、言っても」

アキラはただうなずいた。

「小せえときからだから、怖くはねえけど、うぜえ。まじ、うぜえ。幽霊なんて見たくもねえし、関わり合いにもなりたくねえし。あいつら、わけ、わかんねえし」

男は地面を見ながらそう言った。

「声も聞こえるの？」とアキラが聞いた。

「ときどき。見えてるときに聞こえるっつーのは、珍しい。見えるか、聞こえるか、どっちかってのが多いな。突然、耳元でだれかが話すのが聞こえるんだ。っつーっても、長話はしねえけど。二言三言ってやつか」

そう言って男はまた黙り込んだ。

アキラは立ち上がった。男への好奇心はいちおう満たされたと思った。

すると男は驚いたような表情でアキラを見上げると、「待てよ。もう少しだけ、いいじゃ

ん。な？」と懇願するように言った。アキラはしかたなく腰を下ろした。
「おれの母親な、小学校の時に死んでんだ」
男はいきなり身の上話を始めた。アキラは腰を下ろしたことを後悔した。
「小学４年の時だ。生まれたときから父親っつーのがいなかったからさ、それからは、養護施設ってとこで暮らしたわけ。オレ、集団生活ってのに向いてねえから、きつかったし、問題起こしてばっかだったから、中学出てひとり暮らしできて、ホッとした」
もっとも興味のない話が始まった、アキラはそう思った。
「母親は水商売でよ、でも、ガンで死んだから金もなくて、オレが養護施設に持っていったのは母親のＣＤとＣＤラジカセだけよ。それが、かたみっつーの？　ＣＤ１００枚くらいあったかな。洋楽が好きだったみたいで、レッドツェッペリンとかマイケル・ジャクソンとかスタイル・カウンシルとか、あった。オレ、全部聞いてみた。母親の気持ちとか知りたくてさ。何度も何度も聞いた。それってさ、すげえ、役立ってるわけ、いま」
そうか、自分の音楽史を語りたかったのかとアキラは納得した。
男はいったんそこで言葉を切ると、尻のポケットから小さく畳んだ紙片を取り出し、両手でそれを弄んだ。

「その母親のＣＤの中によ、１枚だけ、邦楽があったわけよ。なんだと思う？」
男はアキラに顔を向けた。顔の美しい比率が歪んだとアキラは思った。同時に、嫌な予感がした。
「ブラッキー・ジェッツ」
予感は当たった。
「あんたの父親の若いときのバンドだよ。言わなくたってわかってると思うけどさ。オレの母親、好きだったみたいだな」
「あ、そう。オヤジのことはぼく、関係ないけど、とりあえず、ありがとうって言っとくよ」
男はうなずくと、「それでよ」と手にしていた紙片に目を落とした。「そのブラッキー・ジェッツのＣＤケースを開けたらさ、この紙が入ってたわけ。オレ、この紙、見つけた小学校のころからずっと持ってんだわ」
男は紙片をパズルを解くように丁寧に広げた。アキラはのぞき込みたい気持ちを抑えて、男の言葉を待った。
「なんて書いてあったと思う？」

男は両手で開いた紙片を持ったまま、アキラの顔をうかがうように見た。美の比率はさらに崩れたとアキラは思った。

「読むか？　……あなたの父親はこのバンドのリードボーカルのタツ君です。たぶん、あなたがこれを読むときはお母さんが死んだとき。このことだけ伝えておきます。母より」

もちろん、アキラは信じなかった。だから、どんな計画をこの男が企んでいるのか、それを掴まなくてはという気持ちで頭の中がいっぱいになった。

男を無視して、このまま帰ろうかと考えた。だが、男は素早くアキラのギターケースのストラップを握って先手を取った。

「証拠はねえ。母親の妄想かもしれねえ。だから、何度か母親の幽霊を見たとき、一回だけ聞いた。オレの父親はタツ君という人ですかってよ。そうしたら、『耳が聞こえないの、あの人』。そう言ったんだ。なんのことか、さっぱりわかんねえけど、あれは忘れられねえ。母親の声だからな。母親の幽霊はずっと前からもう出ねえし。オレのことなんかもうどうでもよくなったんじゃね」

今ではソロのミュージシャンとして年に一度はアルバムを出し、いろんなミュージシャンのプロデュースもし、ときどきはテレビにも出るアキラの父親だったから、耳が聞こえ

ないなんてあり得ない。耳こそ父親の生命線だ。それを思えば、男の話は荒唐無稽だし、ファンだった男の母親の妄想にちがいないとアキラは断じた。だとしても、男の狙いはいったいなんなんだろう。

男は紙片をまたきれいにたたんで、尻のポケットにしまった。

「証拠はねえ。証拠はねえけど、ＤＮＡ鑑定すれば一発だ。ほんとか妄想か。あのさ、兄弟鑑定っつーのがあんのな。父親が同じかどうか調べてくれるわけよ。だからさ、一回、やってみねえか、ＤＮＡ鑑定？」

男はアキラの顔に自分の顔を近づけた。澄明な瞳の奥で残酷な野獣が吠えているように思えた。

「バカバカしい」

そう言ってアキラは立ち上がった。男はギターケースをしっかりと押さえている。

「オレ、ホラ吹いてると思ってるだろ。吹いてねえし、正気だし。ＤＮＡ鑑定、しようぜ。そうすれば、ハッキリするじゃん。別にマスコミにばらしたりしねえし。オレはホントのことが知りてえだけだし。うんて言わねえと、それこそ、マスコミに言うし」

アキラは力を入れてギターケースを持ち上げた。男はしかたなく手を離した。急いでギ

ターケースを背負い、トローリーケースのハンドルを探した。だが、機敏な動物のように男はサッと手を伸ばして先にトローリーケースのハンドルをつかまえ、その勢いのまま立ち上がった。

「寄こせ」とアキラは静かに言った。

男の顔はまたあの完璧な美の比率に統べられていた。まるで、青春映画のヒーローのように白い歯をほころばせ、男はこう言った。

「わかった。ＤＮＡ鑑定はあきらめるよ。そのかわりさ、金、貸してくんね？　20万でいい。絶対返すから」

そういうことかとアキラは思った。目的は金か。なんてまわりくどいシナリオを書くヤツなんだ。幽霊が見えるっていうのも、伏線だったのか。いや、そもそも、すべてが伏線だったのか。結局、へたくそな脅迫、恫喝でしかない。

アキラはトローリーケースの中身をあきらめることにした。

ギターケースを背負っただけで、アキラはハチ公前のほうに早足で歩き出した。いざとなればあそこには交番がある。

男はアキラのトローリーケースをガラガラ音を立てて引き、すぐうしろをついてきなが

ら、こう繰り返した。
「じゃあ、10万でいい。貸してくれよ。兄弟かもしんねえじゃねえか。おい、なあ。おい。話、聞けよ。10万でいいからさ。そのくらい持ってんしょ。あんたんち、金持ちなんだろ。10万くらい、はした金だろうが」
アキラは一度も振り向かず、ハチ公の横を通り過ぎると、まっすぐ駅の端にある交番へと向かった。男はまだついてくる。
「5万、5万。5万円でいいよ。お願いだ。おい、おい、どこに行くんだよ、おい、おい」
アキラは交番の中に入った。
先客が何人もいて、巡査達は忙しそうだった。
道案内を終えた若い巡査が「どうしました？」とアキラに顔を向けた。
「そこで不良にからまれそうになったんで」と言って、アキラは交番の外を振り向いた。男の姿はどこにもなく、交番の入り口のすぐ横に、アキラの黒のトローリーケースがポツンと立っていた。
「あ、もう、どっかに行ったみたいですので、大丈夫です。すみませんでした」
そう言って軽く頭を下げ、アキラは交番の外に出た。

トローリーケースのハンドルに手をかけ、そして３６０度ぐるりと見まわした。スクランブル交差点の歩行者の信号がちょうど青になったところで、大勢の人々の壮大な入替が始まった。

男はどこかへ消え去った。

路上ライブをするとときどきヘンなヤツにからまれる。そういう連中の一人かもしれないけれど、それにしても、とてつもなく異様な男だった。

そのとき、あの男が言った、「耳が聞こえないの、あの人」という言葉がまるで呪文のようによみがえった。その言葉がなぜか肺のあたりでいがらっぽい感触となった。何かがキチンとはまっている。男の言葉と、自分が知っている何かが、鍵と鍵穴のように、ぴたりとはまっている。それはなんだ？

そのとき、父親のある特徴的な振る舞いが、映像となってアキラの頭の中を流れた。

それは父親が音楽を聴くときの姿勢だった。必ず左耳のほうを音源に近づけるように左肩を少し前につき出し、からだ全体を斜めに傾けるのである。彼が「耳をかたむける」ときは、常に左耳が前に出るのだ。

そしてもう一つ、アキラは思い出した。父親の部屋の高級オーディオにつながっている

ヘッドフォンが常にモノラルの設定になっていることを。プロなりの何か特別な理由があるのだろうと思っていたが、確かに特別な理由があったのかもしれない。

右耳が聞こえないという理由が。

どの程度聞こえないのかわからないが、男の母親の幽霊が言っていたことはこのことだったのかもしれない。

アキラはあの男にまた会いたくなった。

きっとまた現れるにちがいない、モアイ像の後頭部のあたりに。

確かに、デュオを組んだら面白そうだ。

Δ